古浄瑠璃集

加賀掾正本　一

横山重
信多純一　編

古典文庫

横山重
信多純
一編

古浄瑠璃集

加賀掾正本　一

古典文庫

古典文庫第二五二冊 ©

昭和四十三年七月二十日印刷発行

非売品

古浄瑠璃集

加賀(一)本正緣

編者　横山重

信多純

発行者　吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者　帝都印刷製本株式会社

発行所　東京都（王子局区内）北区西ケ原三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話（九一〇）二七一七

振替口座東京一四五九七番

凡　例

一、古典文庫の「古浄るり集」の第六冊として、宇治加賀掾の早期の正本を掲出した。加賀掾は、延宝五年後十二月十三日、加賀掾を受領してからは、加賀掾正本と署名したが、こゝに掲出した三種の正本は皆、彼の「嘉太夫」時代のものばかりである。

二、古典文庫の「古浄るり集」は、第一冊に井上播磨掾（第六七冊）を出し、第二冊に伊藤出羽掾（第七九冊）を出し、第三冊に絵巻と奈良絵本に転写されたもの（第一一二冊）を出し、第四冊と第五冊に、山本角太夫（第一六九冊・第一九五冊）を出した。その第四冊には、信多純一氏の「山本角太夫について」といふ長文の調査研究を添へた。

三、宇治加賀掾の正本は数が多いとして、正本の一部を出すよりも、まづ段物集を出して、その正本の調査研究に資せんとした。折りから信多純一氏に「宇治加賀掾年譜」といふ稿本があると知って、それを附加せんことを乞うて、氏の承諾を得た。しかし両者を合併すると、これはやゝ長篇となるので、古典文庫の「近世文芸資料」の第六冊として、昭和三十三年に刊行した。この書が刊行されたので、加賀掾の正本調査は著しく進展した。

四、今や加賀掾の嘉太夫時代の正本三種を翻刻するに際し、ふたたび信多氏に乞うて、その後の発見等について、表記すべき事を求めた。ちょうど鳥越文蔵氏が英仏の資料を将来して発表されたやうな機運に際会したので、信多氏の発表も精彩を放って来た。わたくしは、加賀掾や山本角太夫について、やゝ多く学会に寄与し得たと信じるのであるが、その大半は信多氏の発表を同時に行ひ得たからとして、氏に感謝の意を表す。

五、本書に採用した三本は皆、戦前に作業して残し得た原稿によった。山城少掾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

の蔵本の「うしわか虎之巻」は戦火に亡び、故小山源治氏と元の甘露堂文庫の蔵本は、目下、所在不明である。但し、東大図書館と東大国文学研究室の蔵本は安泰である。むかし恩恵を受けて、今これを掲出することができたことについて、こゝに感謝の意を表します。

昭和四十二年九月一日

横山　重　しるす

目次

(1) 遊屋物語付タリ牛若兵法之恋暮……五
(2) うしわか虎之巻……六三
(3) てんぐのだいり……二三
解題……一六九
宇治加賀掾年譜補正（信多純一編）……一八一

宇治加賀掾正本

遊屋物語

付タリ牛若兵法之恋暮

五段

延宝四年九月
山本九兵衛板

甘露堂文庫旧蔵

遊屋物語付タリ牛若兵法之恋暮

第一

さてもそのゝち、やまあをく、山しろくして、くも来去す。人たのしみ人うれふ、是みなせじやうのありさま也。

こゝにくはんむ天わうのこうゐん、へいしやうこくきよもりの二なん。ちうなごんむねもりとて、こうしよくふさうの、ぶしやうあり。

地しかるにむねもりは。あくまで、しゆゐんゆふけうにふけり、あきは月、はるは花の色かにめで。さもうつくしき女ばうたち。あまた有とは申せども。中にも、とを〳〵みの國、いけだのしゆく、長かむすめ。

ゆやといふ、しらびやうしを、わきて。てうあひせられけり。

しかれどもゆやのまへ。ふるさとのはゝのいたはりとて。たひ〳〵おいとま申せとも。花のゑんのけうなしとて。ぜひにとめをき給ひつゝ。よものやま〳〵のさくらがり。けふきよみづの花みせん。よういせよやかた〳〵とて。おくをさして入給ふ。かのむねもりのおごりのほど、何にたとへん　三重　かたもなし。

あはれなるかな。ゆやのまへ。せんかた涙にかきくれて。ちうやまどろむひまもなく、あんじわづらひゐられけり。

かゝる所に、又ぞやはゝのかたよりも。あさがほといふ女房」（一オ）文もちて上り。　御いたはりもつての外にゐ間。ぜひの御いとま申させ給へと申。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ゆ地やは夢共わきまへず。此うへは御身もともなひ罷出、御いとまを申さんと。あさかほを召つれて、ざしきを　さ（ヲクリ）してぞあがらるゝ。

おま（ふし）へになれは。地らうぼのいたはり。頼すくなくゐとて。文を上せてゐ。ちと御げざんに入参らせゐはん。

何ぶる（ことは）さとより文の来るとや。さらばもろ共によみゐへし。

かんせん（うたひ）でんのはるよの夢、心をくだくはしと也。りさんきうのあきのよの月、をはりなきにしもあらず。まつせ一代きやうしゆの如来も。

しやうじ（入）のおきてを、のがれ給（地いろ）はず。

過（中）にしきさらぎの比、申しごとく。何とやらん此はるは。としふりまさる、くち木桜。ことしばかりの花（ふし）をだに。待（はるふし）もやせ（中）じと。心よはき。おいのうぐいすあふことも。涙（すへ色）にむせぶばかり也。只然べくは、よき

やうに申。しはしの御いとまを給はりて。あつまに下り給ふへし。
さなきだに。おやこは一せの中成に。同し世にだにそい給はずは。かう〳〵にもはづれ給ふべし。只返す〳〵も。命の内に今一度。み参らせたくこそゐへとよ。おいぬれは。さらぬわかれの、有といへは。いよ〳〵みまくほしき君かなと。ふること迄も思ひいての、涙ながらかきとゝむ。

今はかやうにゐへは。おいとま給はりて。あつまに下りゐへし。宗盛聞召、らうほのいたはりはさることなれ共。此はるばかりの花みのとも。いかでかみすてゐべき。

ゆや此よしを承はり。御ことばをかへせば、おそれなれ共去ながら。花ははるあらは、今にかぎるべからず。是はねがいの玉のをの、なが

きわかれと成やせん、只御いとまと申さるゝ。

地 いや〳〵さやうに心よはき。みにまかせてはかなふまし。いかにも心をなぐさめよ、いさ〳〵花みに出んとて、ござを立せ」（一ウ）

給ひければ、ちから及はす御供し、東山へぞ出らるゝ。

花やか成ける。次第也。地中 さる間宗盛は。ゆやと同車に召れつゝ。其外の女房達。さもさはやかに出立せ。清水寺へそ。参らるゝ。

され共ゆやは、母のことのみおぼつかなく。只何事もみにそまず、心はさきに行かぬる。あしよはくるまの力なき。中 涙にくもる花み也。

川原おもてを過行ば。中 いそぐ心の程もなく、車大路や六はらの。ぢざうたうよとふしおがむ。くはんをんも同座有、せんだい。くぜの方べんあらたに、たらちねをまもり給へや、中 けにや。守りのすへすぐに。

たのむちかいはしら玉の。おたきの寺も打過ぬ。六道のつぢとかや。げにおそろしや此みちは。めいどにかよふ成物を。心ぼそ鳥べ山。けふりのすへもうすかすむ。声もりよかんのよこたはる。ほくとのほしのくもりなき、みのりの花も。ひらく成。経かくだうは是かとよ。其たらちねを。尋ぬなる。こやすのたうを過行ば。はるのひまゆくこまの道。はや程もなく是そこの。車やどり、むまとゞめ、爰より花車。おりいのころもはりまかた、しかまのかちゝ　きよ水の。はや佛前に。なりしかは。西もんくわいらうぶたいより、おくのせんじゆのみまへ迄。まく打まはし御簾をかけ、扨御しゆゑんはふたい也。ゆやは佛のみまへにて。手を合らいはいし。哀。ねがはくは、ねびくはんをんのちかいにて。母のいたはりかろく也。みづからを今一度、

ふるさとにかへしたび給へと。ふかくきせいをかけらるゝ。
然る所へ。もはや御しゆゑんはしまりしと。たび〳〵めしのかさなりけり。ゆやは心にそまねども。色にいださはふるさとの、望みもやかなはしと。あつとこたへてさしきに出。おしやくに立て花のそで、かへすもさすもおもしろや。
宗盛仰けるは。いかにゆや一さしまへ。さかなにせんとありけれは。ゆやはすんと。立出て。みね」（二オ）

〔挿繪　第一圖〕（二ウ）

〔挿繪　第二圖〕（三オ）

よりふもとをみおろして。なふおもしろやあれみ給へ。おとはあらしに、ちりてかゝれる花がさ。さなからゆきの。おもしろさ。さつささ

つとちらすはやこれの。花の〳〵ふゝきよの。ちしゆのさくらはちり〳〵に。ちらすは風のとかぞかし

引取みなみをはるかにながむれは、大ひ。わうごのうすかすみ、ゆやごんげんもうつります、みなもおなしいまぐまの。いなりの山の。うすもみぢの、あをかりしはの秋、又はなのはるは清水の。只たのめたのもしき。はるもちゞの花ざかり。ふかきなさけを。人やしる。人こそしらめとまひおさめ。

扨其後ゆやのまへ。かたはらに立よりて、すみすりなかし筆をそめ。たんさくに打むかい。一しゆの哥にかくばかり。いかにせん、都の。はるも、をしけれと。なれしあつまの花やちるらんと。かやうに詠し、御前なる。桜のえだにかけ給へは。宗盛立より御らんして。涙をはら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong